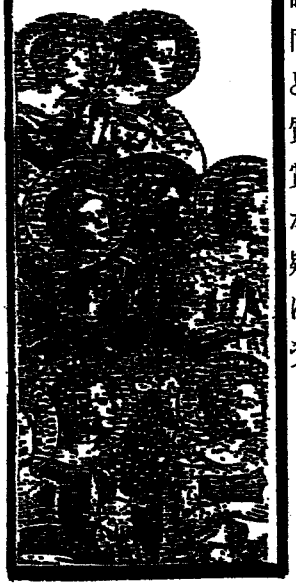
明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

# あんげろす

明治学院大学図書館
11
受入



## 下から上へと流れる「生ける水」

播本秀史

相対性理論が出てきて以来、それまでの知の枠組みは賞味切れを起こしているようだ。時間・空間の概念は絶対と思われていたが、観察者の状況によって変わるらしい。変わらないのは秒速30万Kmの光速。その光も長い間、粒子によって成り立つと考えられていた。物質の素は粒子といってほとんど間違いはないが、光は波動でもあるそうだ。量子力学では相補説というらしい。哲学でいう矛盾的自己同一・絶対矛盾的自己同一に通じるか。即非といった人もいた。あるけどない、ないけどある、ということだ。禅問答みたいだが、しかし、科学でも、物質としてはたしかにないが働きとしてはある、と唱えてノーベル賞をもらった物理学者がいた。これまで絶対的と思われたものが相対的なものになって、合理的、客観的、二元論的知が懐疑にさらされている。近代が排斥し、無効化してきた宗教的知にこれからの世界を開いてゆく光を見出すことはできないだろうか。

第54号
2011年3月

## 新所員紹介

言葉を越えた世界へのあこがれ

下田好行

下田好行と申します。教会は日本聖公会で献身礼を受けました。クリスチャンネームはペテロです。イエスの一番弟子、勇敢なペテロにあやかって名をもらいました。実際は弱気な自分ですが、私もかくありたいと願っています。

影響を受けた人は私のゴッドマザーであるマルタ田巻美枝子さんです。群馬県の榛名町(現高崎市)の新生会の経営する老人ホームで出会いました。田巻きさんは老人ホームにマンションを買って住んでおられました。田巻さん自身もお年寄りで老人ホーム暮らしているのですが、仲間のお年寄りを支える仕事を熱心にしていらっしゃいました。私は田巻さんから何か「心」というものを学んだような気がします。そのまなざし、立ち居振る舞い、人を大切にする気持ち、イエスキリストへの信仰、私の心を揺さぶる何かを感じました。田巻さんは2009年に天に召され、今は小山の修道院にご主人と共に眠っています。

明治学院大学が初等教育課程を作るにあたり、2010年の4月に着任しました。所属は心理学部教育発達学科です。専門は教育方法学です。主に授業研究、学習指導法、教材開発論を中心に研究しています。群馬県の公立高等学校(渋川市・吉井町)教諭(国語)、嘉悦女子短期大学(小平市)専任講師、信州大学教育学部(長野市)助教授、文部科学省国立教育政策研究所初等中等教育研究部(霞ヶ関)総括研究官を経て、明治学院大学に来ました。

私の研究は大正、昭和初期に活躍した国語教育の実践家、芦田恵之助の研究から始まりました。芦田恵之助は国語教育では知らない人はいません。故大村はま先生も芦田の弟子でした。芦田は言葉の向こう側にある世界を大切にしました。言葉の奥にある魂の世界、それと響き合う教育を実践をした人でした。その業績は芦田恵之助国語教育全集全23巻(明治図書)にまとめられています。芦田の授業実践を理論的に支えた人は東京高等師範学校教授の垣内松三という人です。垣内は形象理論という理論を唱え、言葉の奥にある形象を理論化しようとしました。私がなぜ芦田恵之助にひかれたのか、理由はよく分かりませんが、芦田の著作を読んで何か心に響くものがありました。芦田の遺作『共に育ちましょう』を読んで感動でまぶたがあつくなったのを覚えています。その後、私は教育方法学の時流から、教育工学的なもの、授業分析的なものを研究しました。しかし、どこかに物足りなさを感じていました。そのようなとき、シュタイナー教育に出会いました。特にR.シュタイナーの人間観にふれて「これは」と思いました。言葉を超えた世界、思考の彼方にある魂の世界にひかれたのです。私が芦田恵之助の研究で感じたものはまさにこのことだったのかも知れません。

先日、上田薫先生のご自宅で直接お話をお伺いすることができました。上田先生は戦後まもなく文部省で社会科を新しく作り、その学習指導要領も作りました。その後、名古屋大学、東京教育大学の教授、都留文科大学の学長、信濃教育会研究所の所長も歴任

されました。先生の書かれる文章はおもしろい。文章に香りがあります。他の教育学の本では味わえない何かがそこにはあります。それは何かもよくわかりませんが、多分上田先生の文章には言葉の向こう側にある先生の魂の世界を感じることができるからなのだと思います。

私は今までできなかった研究をしていきたいと思っています。それは人間形成における言葉を越えた世界、魂の世界を言葉に置き換えるという作業です。言葉を超えた世界を哲学的に解釈していくことです。言葉を越えた感性や意志の世界、魂の世界に光をあてる仕事をしていけたら幸いです。この明治学院で。

最後の私の好きな賛美歌でこのエッセイを閉じます。古今聖歌集第382番です。

主は　いのちを　あたえ　ませり
主は　ちしおを　ながし　ませり
その死に　よりてぞ　われはいきぬ
われ　なにを　なして　主に　むくいし

しもだ・よしゆき（所員・本学心理学部教授）

## 受苦者のイメージ

柴田　有

東海道の宿場町大磯には「左義長（サギチョウ）」と呼ばれる祭りがある。毎年正月の十四日に営まれる民俗行事である。団子焼きとかサイトバライという名前でも知られている。当地で下町と呼ばれる、かつての漁師町が祭りを行う主体である。晩年のある日、島崎藤村は大磯を訪れ、その折に火祭りを見物している。祭りの火が夜空に向かって燃え上がる光景は美しかった。そのときの感動がきっかけとなって、大磯永住を決意したと言われている。

地元の生活にとって、新年はこの祭りから始まると言ってよい。祭りの日が近づくと、人々は三三五五と海辺に足を運ぶ。正月のしめ飾り、門松、達磨などを浜に置きに行くのだ。そのようにして集まった飾り物を積み上げるのは大仕事である。高さ10メートル以上の円錐状の塔を、松の枝葉を積み重ねて建てる。用意した縄で周囲を縛り、縄に達磨を掛け、中心にはオンベと呼ばれる長い竹竿を突き立てる。このような円錐形の作り物をサイトと呼び、それを焼き払うのでサイトバライと言うのである。海岸線に沿って、砂浜には九基のサイトが林立する。

サイトバライが執り行われる日には、大勢の人々が海岸に参集する。それぞれのサイトの周りに輪を作って群れ、オシャベリをしながら点火の時を待つのである。サイトの傍らでは砂の上に太鼓が据えてあり、その響きが軽やかに耳に伝わる。太鼓は誰が叩いてもよいことになっている。腰の曲がったお婆さ

んがやって来て、ばちを手に取り、しばらく孫と叩いてまた去っていく。少女時代に体で覚えたリズムをそのまま再現する、それが生の証であるかのようである。一月十四日の夕刻、九基のサイトは一斉に火が点く。サイトはたちまち激しい音をたてて炎上し、星空を焦がす。火の粉の流れは頭上をわたり、強い火力で人々の頬が赤くなる。打ち寄せる波が低い音程で響いてくる。

祭りの中心にいます方は誰かと言えば、道祖神と呼ばれる神格である。相模の国の各地には道祖神の石像や石碑が多数確認されている。路傍にたたずむ双体の合掌像は愛すべき情景となっている。民俗学者にとっては無視しえぬテーマであるらしい。面白いことに、道祖神の石像は昭和、平成年代になっても製作が続いている。

ところで、道祖神は複雑な性質を具えている。先ず、子供たちにひいきをする神もある。また、村の入り口に立って疫病の侵入を見張る神でもある。そして注目すべきことに、受苦する神なのである。受苦者のイメージは様々な文化圏に見られるが、道祖神もその例に挙げることができる。受苦する神の性格はサイトバライの営みのなかで強く前面に出てくる。人々はこの一年間に生じた災厄、疫病をことごとく道祖神になすり付け焼き払ってしまう。それがサイトバライという祭りなのである。人間社会の悪を一身に背負った神は踏みにじられ、引き回され、打ち砕かれて、ついに焼き尽くされる。そんな悲惨な物語が、何故か、言いようもなく美しい光景のなかで演じられる。

この祭りを眺めていると、こんな思いに駆り立てられることがある。全体者が存在するということをこの祭りは教えているのではないか。そう、わたくしは思う。宗教哲学者の思いつきではあろうが、この神は人間世界の全体性を示唆している。そう感じるのである。われわれは普段個人の利害関心には視線を注ぐ。また部分的な得失にも気を遣う。だが全体は見えないし、全体は忘却しやすい。全体は無いことにして思考する。それは人間の宿命と言ってもよいのであろう。海を汚染しながら、海全体の浄化力で何とかなるだろう、と考えてしまうように。こうしてあらゆる問題を全体に押し付けながら、全体者を抹殺しようとするのである。けれども全体者は滅びない。太鼓のリズムが消え去らない限り、全体者が滅びることもないだろう。

しばた・ゆう（所員・本学国際学部教授）

## いっしょにたべる

植木献

ここ数年「べんとーCafé」という企画を学生たちと一緒にやっている。キリスト教学担当者として何か学内でキリスト教活動をやるように求められ、苦し紛れの思いつきで「学生たちと一緒にお昼ごはんを食べる会をやります」と言ったのが始まりであった。S 先生の発案で「べんとーCafé」なる名前もつき、外堀も埋められてしまったので、週に 1 回お昼休みに横浜校舎のチャペル脇の集会室にこそこそ籠ってお昼ごはんを食べることになった。

チャペルアワーに集う人々を尻目に、キリスト教の教員がキリスト教の話もせず、祈りもせずにただお昼ごはんを食べるということには、批判もなかった訳ではない。それでなくても参加者の少ないお昼の礼拝から学生をさらに遠ざけることにはなりはしないか。開け放した扉の外に、礼拝に向かう知り合いの顔を見つけるたびに、いつもドキドキしていた。そうしたやましさを隠し味としたお昼ごはんがともかくも始まったのである。

もともと人と食事をするのは好きだったし、その前からよく学生たちとはお昼ごはんを食べていたので、特別な努力は何もなかった。ただ食べる場所を提供するだけだからだ。だが、はじめてみるとこれまで知らなかったことに気がつかされた。

まず、お昼ごはんを食べる場所がないのである。もとより学食は約 5,000 人の学生たちを収容しきれないし、屋外には固く冷たい(熱い)コンクリート製のベンチが申し訳程度にあるだけである。入学した学生たちは、1ー2 ヶ月昼食場所を探して学内をさまよい歩き、そのうちに空き教室の片隅に居場所を見いだして顔なじみの数人で食べるようになる。

しかし、一人で食べている学生も少なくない。さらには、一人で食べる寂しい奴と思われたくないからか、トイレの個室でいつも食べている学生も少なからずいるという。私にとっては楽しく幸せなお昼の時間が、学生たちにとっては悩ましい、苦痛を伴ったものだったのだ。

だから「一緒にお昼ごはんを食べましょう」と声をかけけると、キリスト教に無関心な学生も結構来てくれる。少ないときで 4ー5 人、多いときには 12ー13 人、イベントをやれば 30 人近くの学生たちが集まる。一度来た学生が友達を呼んで芋蔓式に集まることも少なくない。協力してくれているヘボン聖書研究会の学生たちのホスピタリティもかなり大きい。

簡単な自己紹介をする以外には特に何もやらないから、たわいもないおしゃべりだけで終わることも多い。しかしキリスト教の話をしないと逆に気になるのか、キリスト教についての質問や批判も少なくないし、「ハーバード白熱教室」ばりの議論が飛び交うこともたまにある。

でもメインは一緒に楽しく食事をすることである。先日クリスマスパーティをやり、みんなで食事やケーキを作って食べたが、話をすると一人一人様々な悩みや課題を抱えている。それにもかかわらず、彼らは周りの人の空いたお皿を見ながら話をし、食事を取り分けたり、ケーキをシェアしたりする「分かち合う喜び」を実践しているのだ。

そもそも食べることは人の生死に関わるものだ。加えて、食べ物も元をただせば生き物

だから、そこには常に命の犠牲が伴う。命のやり取りの場として食卓は本来厳粛なものであるはずだ。残念ながら、一人の食事は単に栄養として物質をやり取りするだけに終わりがちである。自己完結した栄養摂取は、背景にある犠牲や厳粛さに思いを馳せることもない。

けれども食事を分かち合うひとときは、その喜びの中に悲しみや痛みが当たり前のようにあることを私たちに知らしめる。そうした悲しみや痛みの存在は、今ある喜びに対しての感謝の思いを私たちに促してくれるのだと思う。その意味で食卓のまじわりは、生きることを学ぶ教室でもあるし、潜在的にキリスト教的ですらあると思うのだ。

キリスト教では信じることは思弁的に完結しない。主の食卓に招かれ、罪の告白と赦しの喜びを分かち合うこと、そのことを通して生かされることが大切にされてきた。それならば、べんと一Cafeもちょっとはそうした役に立つのではないか。そうだ、役立つに違いない！

こう大義名分を掲げておけば、こそこそやっている苦し紛れの企画もいつか日の目を見るかもしれない。次なる目標は白金校舎進出である。

うえき・けん（所員・教養教育センター准教授）

「行って、同じようにしなさい！」
—小山晃佑と賀川豊彦

島田由紀

キリスト者は「もっとも小さき者」へ目を向けるよう招かれている。力ある者の意向、自身にとって近しい者の思いには、人は強いられずとも自然に意識を向ける。だが、自分よりも弱い立場にある者もまた神の子であることを、常に覚え続けていることは難しい。

私が2000年代前半に留学していた米プリンストン神学大学院では「賀川豊彦レクチャー」が数年に一度催されていた。かつてプリンストンに在籍し米国でも一時期よく知られた日本人・賀川の名を冠して、アジアのキリスト教について外部の講演者が講演するというものだった。私のプリンストン滞在最終年の2004年秋には講演者として小山晃佑が招かれた。

小山晃佑は、1998年のWCCハラレ大会の基調講演者を務めるなど、日本におけるよりも海外ではるかによく知られた日本人神学者である。在米時代、日本人だと自己紹介すると、アジア・アフリカなどからの神学留学生からは必ず「ではコースケ・コヤマを知っているか」と聞かれた。私は小山の親族が今も在籍するキリスト同信会（英プリマス・ブレズレン系無教会派集会）でキリスト者として洗礼を受けた。たまたま来日していた小山がそれほどまでに著名な神学者だとは知らずにそのメッセージを聞き、福音の持つ熱さに魂を揺り動かされた。

小山は1929年生まれ、戦争中、焦土と化す東京で「神は日本人だけでなくアメリカ人

をも愛しておられる」という言葉と共に洗礼を受けたと聞く。1952年に渡米しアメリカで神学教育を受け、米国人の妻と結婚した後、1960年に日本基督教団派遣の宣教師としてタイに赴任する。その後はアジアを中心とする環太平洋地域で神学教育と各地の他宗教の人々との実践的な対話に取り組んだ。1980年から1996年にはNYユニオン神学校でエキュメニズムを担当した。英語で発信・対話を続ける生涯であったため、日本語ではキリスト同信会が細々と発行する小冊子が永らく著作の中心であった。

2004年秋プリンストンでの小山の講演を、事情で短期間町を離れていた私は残念ながら聴くことができなかったが、アジア・アフリカからの留学生やこれらの地域への関心や縁の深いアメリカ人学生・教授が多数熱心に聴講したと聞く。幸い、小山の「賀川レクチャー」は日本語訳されて出版された。森泉弘次・加山久夫両先生の編集・翻訳により教文館から2009年に出版された小山論文集『神学と暴力』に、「「行って、同じようにしなさい！」ー賀川豊彦の辺境の神学」として収められている。

小山の賀川理解には、小山自身の神学が色濃く反映されている。重要な点は二点ある。第一には、論文タイトルにも表わされているように「辺境」の重要性である。キリストは貧者・病人・罪人たちの間に入っていかれた。小山はよく「ひっくり返る」ということをメッセージの中で述べた。「あとの者が先になり、先のものがあとになる」、燃え尽きない柴を不思議に思い歩み寄ったモーセに神が「履物を脱ぎなさい」と言われる。人間は日常の延長を考えるが、神は日常の秩序を突然ひっくり返される。ひっくり返されたところに神がおられ、そこが新たに中心となる。「辺境」は「中心」から外れているからこそ「辺境」である。しかし、「辺境」にこそキリストは入られ、そこを中心とされた。21歳で神戸スラムに入って行った賀川に、小山は辺境に宿り「ひっくり返す」神の真実を見抜いた力を見てとっている。

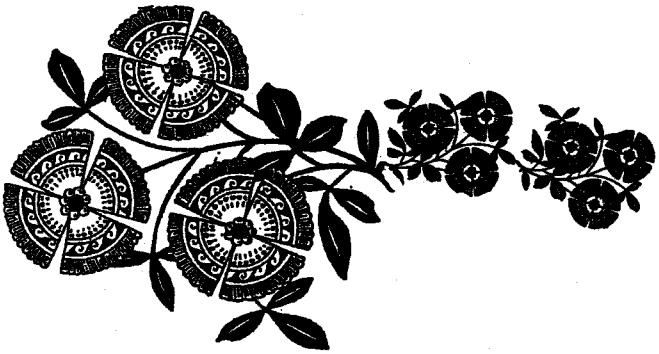
小山自身も「辺境」の者として歩んだ。小山は自分のことを「神学的孤児」と呼んだことがある。戦時下で敵性宗教であるキリスト教に改宗した小山少年は、のちにアメリカでは旧敵国人として、東南アジアでは旧侵略者として、峻烈な差別と敵意に遭遇する。また、タイでは、西欧神学をそのままに持ち込もうとすることへの貧しい農民たちの反発を経験した。しかし、「辺境」で異質な者同士が出会うときにこそ神の力が豊かに表わされると、小山は確信していた。

賀川の神学のもう一つの重要な点として、小山は神における宇宙の調和の思想を指摘する。破れたものは破れたままにあるのではなく、神において調和を求める。このことは、晩年の小山の環境問題をめぐる神学的理解と重なっているが、遡るならば、小山自身が大きな影響を受けたと言うユダヤ人思想家アブラハム・ヘッシェルの思想にも連なるようにも思われる。ヘッシェルは主著『イスラエル預言者』(邦題)で、神にとって、預言者にとって、弱い者・貧しい者に向けられた不正義は世界全体への大打撃であると述べている。この思想は公民権運動下のキング牧師にも共有されている。有名な「バーミンガム獄中書簡」でキングは、ある場所でなされる不正義は神の正義そのものをないがしろにすると述

べる。世界は繋がっている。辺境は中心であり、辺境での出来事は世界全体を脅かす。

賀川は「行って、同じようにしなさい」という命令を生きたと小山は言う。この命令は、どんな人にも—文化的・宗教的・社会的背景にかかわらず—誰にでも向けられるものだと小山は指摘する。単純な命令である。だからこそ、私たちの足元を揺るがす恐ろしい命令でもある。

しまだ・ゆき（客員研究員・本学非常勤講師）



研究所雑録

渡辺祐子

「あんげろす」第 54 号をお届けします。ご退職される柴田先生、客員研究員の務めを終えられる島田先生、新たに所員としてお迎えすることができた下田先生にそれぞれご寄稿頂き、さしずめ誌上での歓送迎という形になりました。巻頭言の頁には、播本所長にご登場いただきました。植木所員のユーモアあふれる、しかし実は深刻な問題を提起したエッセイも含まれています。お忙しい中、原稿をお寄せくださった先生方に心より感謝申し上げます。

活動報告をご覧になればお分かりいただけるように、今年にはいってから SCA の公開研究会が2回も開催されました。いずれも活発な意見交換が行なわれ、特に2回目では、キリスト教学校の本来の使命（ミッション）をめぐって熱い議論が交わされたとの由。その話をうかがいながら、ごく最近読んだ内田樹著『街場の大学論』を思い出しました。

研究会での具体的な議論とは離れてしまうかもしれませんが、敢えてご紹介いたします。内田氏が勤務していたミッションスクール神戸女学院大学は、ただでさえ激しい大学淘汰の波に直撃されている女子大の中では、安定した入学者数を確保できているそうです。その理由を内田氏はミッション（同校のスクールモットーは「愛隣愛神」）を明示し、そのミッションに批判的な人から「選ばれないリスク」を引き受けているからだと述べています。受験生確保のために「誰でもみんな来てください」と広報するのではなく、「このミッションをともに追及したい人は来てください」と呼びかける。逆説的ですが、このやり方で同校は生き残っているわけです。入試委員長を勤めた経験もある氏の「マーケットに追随すれば、もうそれはミッションスクールではない」との主張は、理想論として退けるわけにはゆかないように思います。

さて先般、紀要第 43 号が納品されました。ご一読頂き、ご感想、ご批判等をお寄せいただければ幸甚に存じます。

主のお守りと皆様のお支えのもと、今年度の研究所諸活動を無事終えることができますことを心より感謝申し上げます。来年度はより

多くのプロジェクトの活動が活発になることを自戒をこめて期し、皆様の一層のご協力、ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

わたなべ・ゆうこ(主任・本学教養教育センター准教授)

2010年度1月ー3月の研究所活動
(詳細は各チラシをご覧ください。)
所員会議
第7回
日時:2011年1月26日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所
第8回
日時:2011年2月23日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

明治学院研究1反省会
日時:2011年3月4日(金)16:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

キリスト教研究所懇親会
日時:2011年3月4日(金)18:30-
場所:目黒 香港園

公開研究会
SCA歴史編纂PJ
第1回
「現代の福祉を考える―大学での学びと精神障害者支援活動を通して―」
講師:谷中輝雄(仙台白百合女子大学教授、社団法人やどかりの里会長)
日時:2011年1月28日(金)13:00-16:00
場所:白金校舎キリスト教研究所
第2回
「キリスト教学校教育の現状と課題―キリスト教主義学校の学生として、また、教師としての体験を通して―」
講師:花島光男(キリスト教学校教育同盟事務局主事)
日時:2011年2月12日(土)13:00-16:00
場所:白金校舎キリスト教研究所

SCA研究会
第7回
日時:2011年1月7日(金)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所
第8回
日時:2011年3月11日(金)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

新着図書(1月-3月)
雑誌
・『福音と世界』No.1、2011。
・『福音と世界』No.2、2011。
・『福音と世界』No.3、2011。
和書
・『賀川豊彦献身100年記念事業の軌跡 Think Kagawa ともに生きる』、賀川豊彦記念・松沢資料館、2010。(加山久夫名誉所員寄贈)
・『レスリー・ニュービギン宣教学入門』、(鈴木脩平訳)、日本キリスト教教団出版局、2010。(森井眞名誉所員寄贈)

・『宇宙聖書　COSMIC BIBLE』、(宇場稔著)、セルフ・ヒーリング実践研究会、2010。(齋藤陽子氏寄贈)
・『ミサの式次第』、(日本カトリック典礼委員会編)、カトリック中央協議会、1999。
・『カトリック教会のカテキズム』、(日本カトリック司教協議会、教理委員会訳・監修)、カトリック中央協議会、2008。
・『教会の社会教説綱要』、(教皇庁正義と平和評議会著、マイケル・シーゲル訳)、カトリック中央協議会、2009。
・『婚姻の尊厳　教区裁判所及び諸教区合同裁判所が婚姻無効訴訟を扱う際に遵守すべき指針』、(教皇庁法文評議会著、日本カトリック教会行政法制委員会訳)、カトリック中央協議会、2009。
・『諸宗教対話―公文書資料と解説―』、(日本カトリック司教協議会　諸宗教部門編)、カトリック中央協議会、2006。
・『着床前の段階のヒト胚　科学的側面と生命倫理学的考察』、(教皇庁生命アカデミー著、秋葉悦子訳)、カトリック中央協議会、2008。
・『洗礼を受けずに亡くなった幼児の救いの希望』、(教皇庁国際神学委員会著、岩本潤一訳)、カトリック中央協議会、2010。
・『教皇庁　奉献・使途的生活会省　キリストからの再出発　第三の千年期における奉献生活の刷新』、(日本女子修道会総長管区長会訳、司教協議会秘書室監修)、カトリック中央協議会、2003。
・『教皇庁移住・移動者司牧評議会　指針　移住者へのキリストの愛』、(日本カトリック難民移住移動者委員会訳)、カトリック中央協議会、2005。
・『教皇庁　正義と平和評議会　教会と人種主義』、(アンセルモ・マタイス、保岡孝顕訳)、カトリック中央協議会、1990。
・『宣言　主イエス　―イエス・キリストと教会の救いの唯一性と普遍性について―』、(教皇庁教理省著、和田幹男訳)、カトリック中央協議会、2006。
・『教皇庁教理省　自由の自覚』、(ホアン・マシア訳)、カトリック中央協議会、1987。
・『カトリック教会の諸宗教対話の手引き　実践Q＆A』、(日本カトリック司教協議会　諸宗教部門編)、カトリック中央協議会、2010。
・『人間の尊厳と科学技術』、(教皇庁国際神学委員会著、岩本潤一訳)、カトリック中央協議会、2006。
・『ニューエイジについてのキリスト教的考察』、(教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会著、カトリック中央協議会　司教協議会秘書室研究企画訳)、カトリック中央協議会、2007。
・『指針　あがないの秘跡』、(教皇庁典礼秘跡省著、日本カトリック典礼委員会訳)、カトリック中央協議会、2007。
・『終身助祭―養成基本要綱・役務と生活のための指針』、(教皇庁教育省／教皇庁聖職者省著、日本カトリック終身助祭養成委員会訳)、カトリック中央協議会、2009。
・『教皇庁国際神学委員会　記憶と和解』、(東門陽二郎訳)、カトリック中央協議会、2002。
・『教皇庁　聖職者省　司祭の役務と生活に関する指針』、(福岡サン・スルピス大神学院訳)、カトリック中央協議会、2001。
・『教皇庁　教理省　ファティマ第三の秘密　教皇庁発表によるファティマ「第三の秘密」に

関する最終公文書』、(カトリック中央協議会福音宣教研究室訳)、カトリック中央協議会、2009。
・『教皇庁 キリスト教一致推進評議会 エキュメニズム新指針 その原則と規定の適用』、(東門陽二郎訳)、カトリック中央協議会、1994。
・『人間愛についての指針—性教育のためのガイドライン—』、(家庭委員会翻訳監修)、カトリック中央協議会、1988。
・『教皇庁 諸宗教評議会・福音宣教省 対話と宣言 諸宗教間の対話とイエス・キリストの福音の宣言をめぐる若干の考察と指針』、(ペトロ・ネメシェギ訳)、カトリック中央協議会、1993。
・『教皇庁 教理省 生命のはじまりに関する教書 人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて』、(ホアン・マシア/馬場真光訳)、カトリック中央協議会、1996。
・『教皇庁 信徒評議会 高齢者の尊厳と使命』、(吉向キエ訳)、カトリック中央協議会、1999。
・『宣教師ニコライの全日記』(全9巻)、(中村健之助監修)、教文館、2009。

DVD
・『赦し』、(チョウ・ウクフィ監督)、死刑廃止国際条約の批准を求めるフォーラム90、2008。
(寄贈)
・『"私"を生きる』、(土井敏邦監督)、「"私"を生きる」制作実行委員会、2010。
・『長崎天主堂 五島列島の教会堂 Ⅰ』、有限会社デジタルメディア企画、2006。
・『長崎天主堂 五島列島の教会堂 Ⅱ』、有限会社デジタルメディア企画、2006。
『長崎天主堂 五島列島の教会堂 Ⅲ』、有限会社デジタルメディア企画、2006。
・『世界遺産 イタリア編①』、TBS、2002。
・『世界遺産 フランス編①』、TBS、2002。
・『イタリア 聖地巡礼の旅 イタリア紀行 Vol.2』、株式会社アートデイズ、2003。
・『葬儀と日本の宗教行事』、(勝本正實監修)、ライフエンターテイメント(いのちのことば社/ライフ企画)、2007。
・『ペトロ岐部と187人の殉教者—ゆかりの地を訪ねて—』、(宮沢賢太郎出演・監修)、有限会社デジタルメディア企画、2008。
・『イタリアの絶景』、NHKエンタープライズ、2009。

CD-ROM
・『第2版 カトリック教会 CD-ROM 2000-2001』、カトリック中央協議会、2000年。

VHS
・『CHURCH WEDDING カトリック教会結婚式ガイド』、ドン・ボスコ社。

あんげろす　ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第54号

2011年3月1日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636　東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩